

『こころ』の浪漫派と自然派

Junko Higasa 2015.7.12

先生という人物に表されたものは、「朝日講演集 明治 44.11.10」の『文芸と道徳』の中にある。

『今一つ注意すべきことは、普通一般の人間は平生何の事もない時に、大抵浪漫派でありながら、いざとなると十人が十人まで皆自然主義に变ずるという事実であります。という意味は傍観者である間は、他ひとに対する道義上の要求が随分と高いものなので、ちょっとしたふんらん粉紘でも過失でも局外から評する場合には大変から苛い。即ち己が彼の地位にいたらこんな失体は演じまいという己を高く見積る浪漫的な考がどこかに潜んでいるのであります。さて、自分がその局に当ってやってみると、かえって自分の見縊った前任者よりも烈しい過失を犯しかねないのだから、その時その場合に臨むと本来の弱点だらけの自己が遠慮なく露出されて、自然主義で何処までも押して行かなければ遣り切れないのであります。だから私は実行者は自然派で批評家は浪漫派だと申したい位に考えています』

これが叔父の不正を責めながら、それ以上の過失を起こした先生である。道義的な浪漫派の中にも不徳義があり、徳義のないように見える自然派の中にも倫理上良い所がある。漱石は「藝術的に嫌味なく道徳的に正直」という浪漫派・自然派文芸の正道を著せる小説家としての手腕を『こころ』で示した。